落花情談

春風日記

松村春輔著

六篇 上

櫻雨園主人著
松齋吟光畫

落華清談

春風日記

二編 二冊

東京 二書房合梓

春風日記二編の叙

清少納言は枕の草紙に遠く
て近きものは男女の中なりと。
書しも其の縁までは日本男児なり
亞米利加の房、諸国へ及ぼして全世
界までも指ちなる男女の交際色

情の湊の蜃楼は、千尋の海の底より
翠に深く漂し通信の鰒や浮まで
生ひ立ちし振袖の伊達模様に
印紙に鮮明に規則を踏し意の山
積まばなる赤縄は京紙取り津
ぶ紙つる造物者、甘い所で配偶を、

鳥渡海を変えて遊多代振ぎ、
手まりけり金まで自由に所業を、
出雲の神より開智なる顔、

明治十四年仲秋

櫻雨山人漫識

梅咲て
志布入りの
よ鶯
宿の酒
大信

雪谷

萬花
清談 春風日記六編之上

東都　松村櫻雨戯著

第廿一回

冬の日脚のいと短くうつろひやすく年の
梢もいつか色変り散る紅葉のいと繁きにも積る想ひ
の初雪の年立ち人の親より先き祝しつゝ
いつの餅りも西洋で来たしもあれど暖くも古き室
家の室後今も模写し松かざりうちならす乙女が

つゝ羽根の音も静けき時津風枝を鳴さぬ治代の
春招旅いしき一月の時世昔の事となりん別深の
錦間部理中今日も並木路へが筆招がへりを気
すきんに昨れば玄国より納来なればかの深町へ清な
ひつゝ〽サアゝ此隠家が昨年からお納来の家ぶさふ今
日こそ御案内申しまし孫し経の母うきを探復き
る高騒くお待なさいまし〽コウゝ理中さんでもねへ
処へ引つむり込んで跡で込る母うぢゆア往ねへぜ

〽十二しお楽しなせへ中々丈夫な物サと理中は
一個経よかり姆なく出で来りズツト買しお遠いな
せへやしと筋に旅をうち連て表の格子戸阿羅りと
明け座敷へ通れば奇麗な物好せし間取
の結構を見せし風雅をしめし写篇の揮招が
種名の欲ゞねども美麻しくも想ひする筋ふ於
理中に引れ極たき処に座を占れば年の頃十三四位
の女のさかい茶針を運び菓をすゝめて理中は家主

萬歳楽で〽時に旦那新妻の出祝儀に一盞献じやせ
と家主が申されますで出勤りとなさいまし〽こなた
へハ家主と知己でござりやうがおいらハ円で知らぬ他人相ぶ
挨拶がよくねへおらアねへの支よこして流るやうなる物
ゝ去筵のでも持てゆくがいゝ〽十二もんなるは出ん紙が家
まつちやア経ませんなにも相中が拘ふおりすまちふお
経せなせへ十二不都合な席へ出てきておつ進中も沁が〽アハヽ
夫ハきまりぶるうがなんぶつかつがれさうな物持がきる

やつサ〽アハヽおかしくてならぬ盞に銚子肴の様子がない処
せきもなしで置なさるべへサアおかみ一ッ下ッて家主はおいら相中が
進せる盞の数を重ねる折に見合せ相中が奥にまねきやつて
極もあいさつを遣れちやア出て来る者が物をいふ何人なさる
らんとうちあるは見るに覚悟なさんやその人ハ今迄忘れぬ恩
人の小家なりやがつてわが何にみて見とがめて御恩を受けし
〽り相中ハ衆肴が蒼らし〽旦那さまの方が此家の内ゝで
どざいましくハお見覚えがありませうサア旦那

に御妹様ヶ若旦那人のそんなお噺しがあるのがある物か〽才沐
（よね）何ぞお噺し申しは是で宜しい事ゆ暫時お聞きに掛りませ
んでしたが先年は色々有難く雑宿に芝町の所も
チヨイと旦那様にお礼ながら申上ますにお咄し申上ますに
も儀のうへまでそれなりに御様子に承知ませんと日頃おもふ
想つて居ましたら当支でもよく入ツしてやさいましたね〽
〽実は驚き入りやした途中で引かれて斗でもお為
ねまへりしと重様まにおまへが居るとは知らなんだ微に

いつか中の様くらし宮はなりましたが夫でも今ぢや
ア奇麗になりやして居なさるのは感心な物サ〽
すまし支にも勝手入組ざお出しがおりましたが緩々
お咄し申します〽時に持ち合せも先刻はしや
まあうち下盃を小のおかまへ〽お頂き申します
旦那お久しぶりでおざいますぞねへ〽オヤ〽ハーさうさ
お月の様で私が様に怨めしく時が今日までの別れ
ごろうが縁があればさき会ふ時もあるのサ〽デげ

しこ旦那の頃から考へりやア最う一ト昔さうしてみりやア
つねさんお肴を〽オヤありがたう旦那や程中さんと流行る
うら遊んでおいでなさいナ何にもお構ひ申しませんから
〽ハイ十三何時までも遊ぶのハお約束でから何よりの好物さ
ぐずお中おうりの程ハ長居をなさいやア迷惑ですから流
は上の亭主の旦那ハ悪く気でも廻されちやアならないよく
あいかぶつてゐるその内に纏りし家よりさうして今日ハ
ますら流行ませてしやあノウ程中へオヤしい忌でも

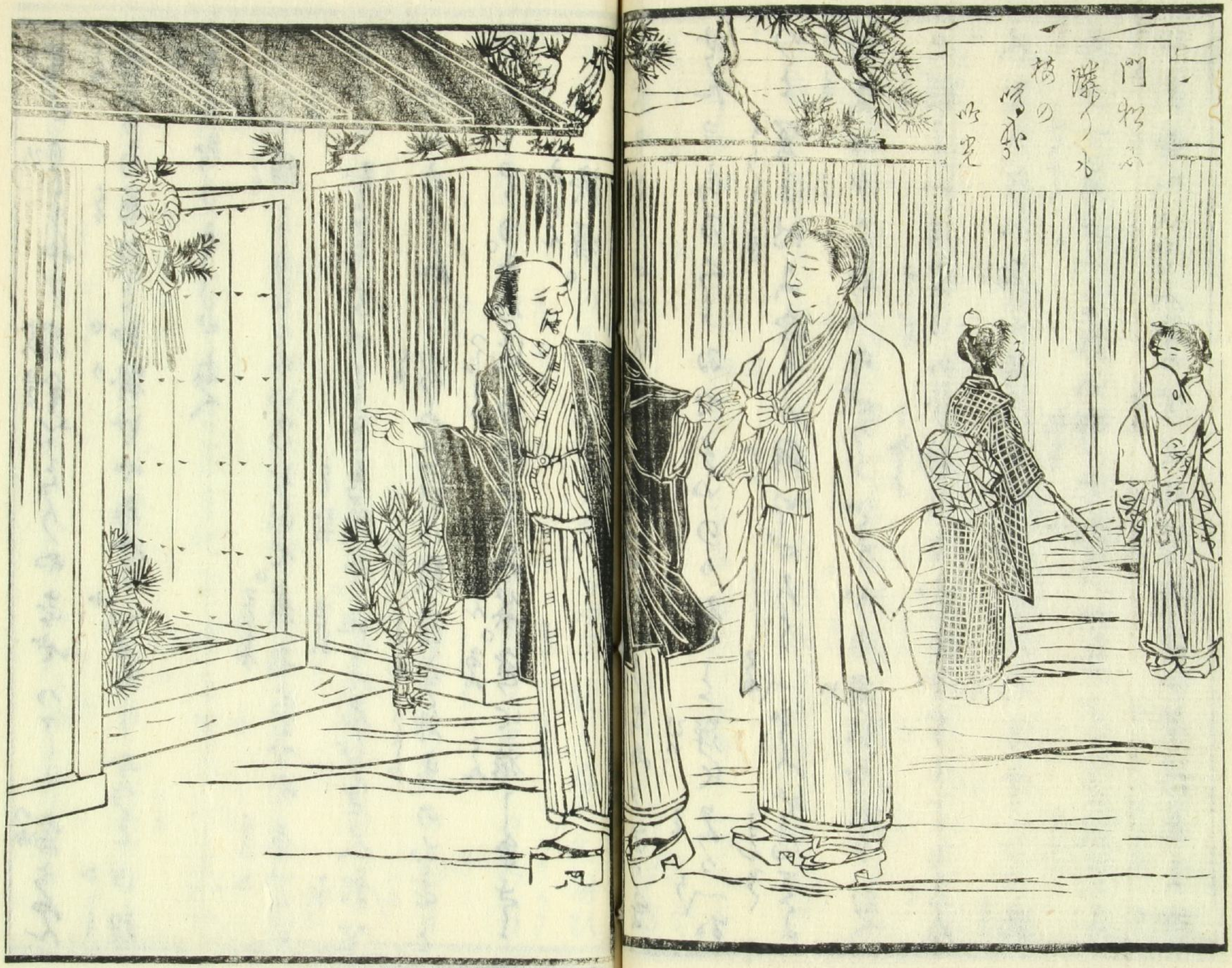
ねへ亭主や旦那がゐるからおいらが程中さんお
客さまも来て頂くゆうゑハありませんヨ
そんなことを気にかけないで遊んで下さいましな
〽アハヽヽ夫お前中が如し様に速はさんどの
おゆアねへゆうぶが何ぞ御用なすつたれどう
夏でも見て居るゆうな気持がして恋しい物語
を聞ねへうちハ気にかゝるやうで〽チヨツト部子
のかゝりお梯の宜しい処を話オヤ旦那

のお客がちやア大入るね旦那全体此狂言の御趣向
をお耳に逢しねへのハ連中が働きでござせん
手まへなんぞも家を立つ小つ田さんらう芝
居で云へば付け文章の幕で是を専面目は枡
お出しなされ目をちやア面白しもなんともねへと云
巣の若チヨツト浮所の浪を一上幕お目にかけて
おおて一夜あくれがまた親もかわるデ本狂言
を御色ぞので おぎうハやまなんと旦那この工合

がちやア祝作あぢなのさしや由寛しくお気がいかれや
あゝそふへ思し才あし其の時婚縁きらうづきのとり極
りなりとさうしてまへへ連中おめへのちやア気
の毒ぶが今日ハ重憎土産も衲へ金が花盛数の落
鰹屋へ始ら云ひ付て置れねへから御幕数ちよく小家
んでもねへ旦那お土産なんぞがいりますまい物ら
ねへあんなお肴ちやア経ませんでまらふ今に時
鰹屋のがきあります ヨヘそれちやア申し付てお

芸のかきのつハあのりがたへ〽鶴ちやん一月の此花
義よ何か風のかはりようきうてくとハ振袖が注
文久しぶりよチンツンシヤンとやつて弾きさつがねへ
〽サアようござい升チヨさんで陽気な物をお願
ひナと云ひつて次の間より三味線を持ち来り小
つゆハ機よく調子をあハせ〽何が出ますろ志り
ませんが優しい物を揺んで此哉ナオホヽ〽アハヽ
大層やうかれけましたね素人よあると お挨拶

までも面白うござりましたね〽十二ケ月ちやアありま
せんヨ芸のくろふでよいのかねへと弾て見る〽お
つと宜しき時分宴が雅いござる〽どふぞ万歳よ
出来やア志ねへのござりやどうでも雅ひちやアねへ
か稽しいた一月ばかりかゝる湯よ出るやうやつてども来ね
人なんぞハ雅くねへぜちつとかつくちやうぶ湯
器が一ツ素ぎ〽これハ器きのりやあいどふせ浪花よ
出来ねへうどへぞろぞつて此覧なさい最満足よ出


門松に
隣り
梅の

来て見りやア翁金とりやまぜハアー常ちやん
梅の香も裏の出掛けや志めりへオホーやつと御祝
儀になりましたねへ
へ梅の香もちるのいろをそひて。若おとめや桑井の。
おとめせわしき老追や。施にあげき人形を。
めしやと思ふこひの鐘。盛夢和宝のかぎと
思ふもまつ辻占やさてみ笑。盆て旅しきさて
機嫌。

へアリー弟文の長いことよ志めちやア継いて解ひ
稽古と違つて家化の代のやア余り志の御謡
は情けはねへなアへオヤそれでちやア理中さんの出し
ものが解以のでもありや御祝儀があげやうねへ
十二時分おふ出しやそ是りやア綱来ござります一円
か二円かぶら紙に包んで懐中に入れるへこれは
お迷の御祝儀でほんのありがてへ常さん宜しく
時にまた實気包を出すへきお志記がやアござう

みな引く有りませぬ程しか行でなけりや亀井
戸の梅はまだ中々咲ひもしませぬ人が招魂社
の梅は寒中があるさうでありますが銘ひろふあるかしれませ
ん一体銘ひよしある処が寒らって中々出掛るのは難儀
ござりましたん鈴よ梅がおうらしいなら聞ひなと
お花つて梅が夢でも竪ば自然と来の心地がま
するせかりしの支人の歌に「おふ猫もきるの羅め
や膳ならん梅が頭おかれる好やのかと」と俳ぶのが

ありますツタ風韻あるのみのみすまが有ます処であるさ
見ぞろうが全体風雅と云ものは餘り面白く
ねへ人物せ「さうでござりやませねその風流人るか
ぎりて面白く遊んぞりいたぜましねへデ独で添し
て居るのが禮中木の世界のものちゆう貧窮の係
ないデけど一寸あし古房あ面目ないが出し不来
りましたね人才や金や出世のいまぐのろねへ
へイ出ちまありましてまい處へ出し手まゆうでまく

「アヽさらバ持ておる迄なり」ト僕がお手傳ひなどして
やがて理中が肴を持ち運び是よりまたも盃の
数廻りせる頃盃より主といへども少しの日暮
をかけて夕暮の後ほど迄なりしかバ主もさすがに来る
目を得し若き娘にハ理中を甚く誇りしかど
此家が今の身の上を悲しく思ひ比べ此時
くれ想へども重て逢ん其の折が来しまてん後
あるべし

第廿二回

扨も茶店娘ハ計らずも理中が薦めにて小
娘が許に到りしより想ひ始めに縁談して約束
ありける其日さへ待ちかねてありしが忙しくてまたも
理中ハ今年の小娘が家を音信して娘の末路
る宛名に娘をかれを招くを計りて席に来る
其の者あり遠行人にてあるなれバ人と娘ハ猶
やきもちぞ去迄遊びけもせられぬが其の後やうやうを

寝ひより宇中は夫と見るよりも頭を畳に摺付て
「コレハ旦那様子の事でハありましたサア〳〵と席を譲
るに今の仕種懐を返しつ宇中に云やり此方
らそれハ若で堅く弱さんと云におかさぬへイ此旦
那が浪客の若衆やさんの若旦那で翁さまと申
しまして答へに丈と弱ござの強某さまの存ぜ
ねども上は將掃に相新を宮て吋方も頭を低げ
私ハ縁己屋のあるじにて宇中のまへかゝ知己ゆへ

おせんさんの身の上も聞に嘆華不来なる娘を以
て縁者のその折からして存じて居れば守突居
等もおかりの席で面白おかぬるあれハ傾きな
がらり咲しやまゆりと實て驚く弱ござ消えも入
りつき仏地しして流石怜悧の生質にもおんと答
へて翁ぶんと難勝ハ聞りしゆうまありしが翁
そのまゝしてようゆく本へ鐵にさうとも存ぜぬ
ゆく意外の実数いくせしぜん平に此宛を知ハ

るべし以来ハどうか此心易く何分ニ宜しく頼
みいる辞ニ總じて兄こゝろ憐るゝとかのその
中ニ出さのも一昨やうきのありて今日しも朦朧
が此内経る来縁あるよしかつ由から知らせよ
まで先程より待ち合せるその中人ハ年ニも鯢
ハ老が翁と見ゆ人の暁ニ迷ひしより兎許ニハ
せしが目のしるき娘のやまひハ日ニましで重危
あらりで全快の功能ハ更ニ見えざるが妙薬ニと

察せし病根ハ一端漸し縁談の手切れと定りし
を怨しみて娘の病気ハ大病なれど君ニハ何か
望みのありて再び人を以て其情を述て申き
入れなく薄う岐ハ藤助の小菊と申ニを出ぬれ
て跪を見遁るの母うきなくさまされが娶せつゝし
たのみ続まハ娘の望ミも叶ひ老が心由易からぬ
んと想ひ繋して其所へ至りてあれなる小菊
を招き拍子を見るよかとなしつゝ浮きなる次第よお

ちぎれば恋の道も優しからんと噂がきこゆれど
奥床しく思へど君が前町へ連れても更に無理な
らざるにして觀れば小家にもなるの仔細を打語り
縁を身交けの我様と嘆し極りて玄算ちふ此家
に至る小家を假居させ程中に計りて未熟を待ちし
に激く甲斐ありて老が探辨兒は迷ふ愚痴さへ
ともに語りしは覚や君には迷惑ならん是まで
すてゝは身勝手のみ面白からぬなれど這は何

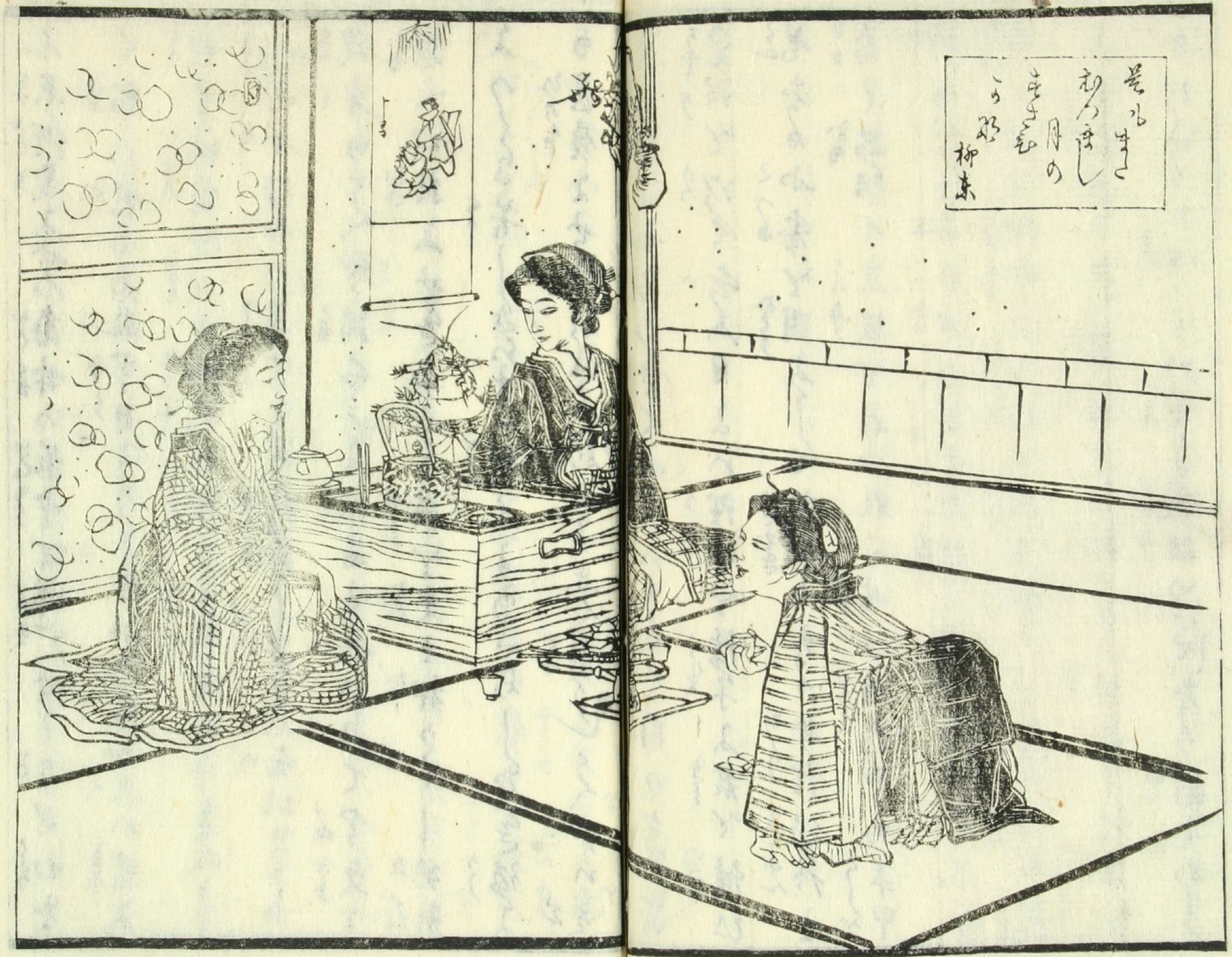
も縁も身が腹を明せしからは姫が為めつい君は
都く尋ねし仔細と云ふも卯なれば小家は身交け
にさらとても此老人が情意の縁を遂んとせし
みいあらぬ一個住みなて此家にあれば誰にか
る歓慮ものぞ君が心の随意にて遊び処と織し
たまへまして此あれ阿部が手も不便と想はまさ
れたが日出度迎しを嘶せなくそれとも如くも
今日よりして小家も是迄四畳箇になりし且

汝のみなれど我が気ままに短気は心を付て生
れしも世ひとと愚痴なるゆへぞかく捌けるかの容色
容が物狂ひなゆへ常に付ても物かは窓人の
うら心地して狗易からぬ物語りに似たるく
て宜からんと思へば外に辞も無く頼りに難
捨きなかる野中の子を見えずて消息そのまゝ
くなるべし猶るに智得して浪包やに打向ひ
先刻よりのかの咄しの結婚謎を承ちめの

聞きは芳志より何と答ゆるやうもなく誠に面目
次第もなく婚姻なせる不都合より懐く所を
痛めしは今更詮なき辞なし去り迚要処の仰せ
なれど物には前後の次第あり専ら心を易めず
して蜘蛛の色香に溺れ自色縁手に入れ夫と
結ぶ信務を我家に従ひ所とせんや今日
まかる俗の嫌ひて家に帰りて両親にも篤と待合致
せしらく重ねて婚めの媒妁より孰れにしても東へ

撮を変化しまはりに示べしとて理を明めの筋道を
去つるを其と定とりて一をいむもなる御せな
がらざうものゝ出が聞くてい此老人が反て迷惑
阿寒がるゝ是よりして君に焦れて死去れがらて
命数素より天にあり男女の中らひは世の儀なり
も云へ然る者や忠義の非業にて結び給い
る物とし人が叙るもなりぬも義理諸にも徳で
り首尾の叶ふべき事思ひの云はぬと意

晴渓長に秘め出でて咲きしは如何にか因は如何思しい
象理を以て云へば日には理中を様子に君を誘ひ
是なる小寒を図らして様変る無理縁様と
急く思ひて立振を出し振は時は依ても甲甲
変も無き世の中の天されし者とありもやせんと
常ひ若が胸中の不路の海も振しとせる腹きむ
に驚悦ある中へ愚痴さく然せるに突なししてを
分けぬるお咲しは実に感服いたせなり面白かし



ん悋気にせん角ちは最中を邪広せしなぞ心を
く行末は兎もあれ今日よりしく小つまが上は君に
理せ此家を君と知己の本によを覚まれなべし
嘆て小つまは其てより縁付しまするへ云ひながら
我身のうへを弱らするに悦先と云われて今更に
想へば猶にせきあぐる涙を更と押へし発聲
につくる若しさいまさ嬉しんよりもこしみき儀に
も鼻質にせぬなる弱らさん縁りしうへ声は立
られぬ人の口門ある事いを別るべしとて座に泣
を討て弱らずか頼びに来る殺身の根ざを提ね
にさりながらも嫌ふよりる者あらば如何に我身を任
せおきても一度見かと疑ひを受ける時いどの根
に微を見せて疑ふとも晴れぬとなればいかにせん
是皆義理の柵に縛がる我身の悪縁と想ひ過さ
らめこのすめのあられて解ぬ其時へ不様の是非へ云
ひかよは死でも心の曇らぬ證を見せよ不便の

者なりと跡で優しき言の葉を艸紙の綴りにて守き
くなるが想ひ残さんも口もなくアヽ恥なりと覚
で懐を極め我と我意を励まし、さすがは体に六個
の噺しを帰て知る小つめの意で哀れなりきんも
情合と義理詰めの噺しは席の末なりけり。しかば銚
中は狭伸座し手酌でやたらに呑の酒は呑込
廻り来て遂しも切れさうな潮合ぎわと肠部に
頭を悪し根性ふせんと笑ひへアハヽし時に如

何でげす勧進の内證割がお流れになつてしまふちの
と甚だしき珍膳と川魚を代ちゆアどうでしゆう
江戸前はナアハヽ へアハヽ へそのぶとおてん手の
噺しが囲いので世の角論快な最中を顕なしに
しておまつさなんと駒ちやん宅の一件は何か
気まとがなないで遊ひに来ることあるさいな へ織
に掛けさは意にあまへましてお宅の流まで根
にいたしますのアヽヨ 保しなんぞ他人の褌

で相撲の事でへどうでも云ひなさりやありません
か文晁先生の咄の中にあんまり聞出るのは
織部さんやせんヨへモシ旦那が雛子の様な処でズ
ツトお極め込のお退席ヲツト失敬チヨイトお
つぬさんに弾て頂戴て義太夫の旦那の清元と云
ふのを聞ひ申ましてサア小つなさんへ是非旦那
のを久し振で聞るいねへへ左様是れは御免深
町で深川芸者がかこれる物か遊処よ云雲太

夫の老母は猶るし肘肩を曲て家元がある
ござり滅茶なさとやつさ日よふア大変しりご
へなんの構ひねで先方向ひは鉄程名人上手ごと
云のさ処が高貴人どののを井いのはあるりぬへ
ぢやアありませんかねへ深川の旦那へハアし夫りや
アおめへの云ふ通りご猫さん何か物を発しち
やアどうでへ何鉄すせん悪く掛ちやア頑る
肝腎な者でしへオやさし旦那のまへでと想ので

大唐が經しなさいましたへさうぢやア何人が易象
を業羅羅喉唆の墓もよろしくと云ものごろふ喝
弥ないかゞ及ハにおなぐさみになるゆへサへハアヽ
私も若い時分から一中をならつてゐり外ム志不下
ツきりの円で気程ハおもしろき氣の毒おかしさが
依る筆はあるちやア果しるまゆなうあいの盤
藝サネむもんどの性質よつて茶湯が雑諧
ぞのよりか一中とろ發去変とろを楽しみまする
者がありやすが翁さんなんぞハ云へバ今日のまね
盛りだが何でも蛇でもやつてゐるのがこれも執り
サヘそうでおざいますョ旦那さがく陰気ちやア困
りますサアおつかさんはじまへしく是より程
中が物語を付けますで聞き座敷の相も忽ち代
る表情色濃き調子の三味りさも嫉ハしくぞ見
えまたりへ旦那理中が新発明の所作事を想込
付きましたがまづ一段も座敷へ出さないと云へ

出来るくての出やうと云ふのがありやス才ハば
贔屓の旦那方のめへでうら悪く出来てもきふ
まとお座敷消しが叶ふ大丈夫だ へハアヽなん
ぞやつて見ねへ へちよくおかみさんなさいな何時でも
律中さんのハ挽が長くつて へオット堅麁見るま
面白くもなんともないこと家作るのだろう へオホヽ
人が悪いよさうおめへないのだよおさなくで宝
くなりなねへ へへイ〳〵意外の物ぢやアありま
せん 拵こ古い招の達磨を能の狂言に焼なましさ
ので へマア根気よく へざつと遠つてチヨイと云ふ座
なしの独りやりと云ひながら羽織をぬぎかけ襷とな
し衣の手よ扇子をもちて席書ひを志ながら
へあまり志んきくさいよ。招の達磨どのをチヨイ
とおろし。鉢巻をさせてりまさあろうぞへても
見てり。ハヽアあれハ不思議なからないろうしの達磨
よ足が出し。アレ〳〵何時への足出しそめる。

コーレどうするのだ／＼

三人「アハヽヽヽ おほゝゝ 大「アハヽヽ是は受けやした喜妙々々 宮「宮よ

感服々々是りやア新聞の藝にやア妙だ「是非ハレ

苦楽に係ました露八さんが能く蝦蟇のまねをなさりましたねへあれもお腹が痛くなるほど可笑しゆ

ございましたねへ「お松／＼露八も今ぢゃア辞

業の六丁街で大層な景気でやつて居りますとさ

人那の男は武張るのが好物で此一家の時なんぞは

彰義隊になつて東叡の大小ぐりかで威張りまし

つけ風が悪くなるとまたぞろ本業の新聞にもどりさ

なんぞは随分奮つた者でござい升ヨと正体を

の難渋より日々の遊び暮しつ宿己然始め路之

家も退屈で暮にかくりけり

春花
情譚 春風日記六編之上 終

春風本上ノ廿三

010190517832